

# つながりから結びつきへ 視覚障がい乳幼児に関する研究大会

見ることの不自由な子どもたちと、その保護者を支援することを目的としている視覚障がい乳幼児研究会（山本利和会長＝大阪教育大学教授）は、8月25、26日、中部盲導犬協会 盲導犬総合訓練センター（名古屋市港区）で、第40回視覚障がい乳幼児研究大会（愛知大会）を開催した。療育・教育・医療・福祉関係者、保護者ら、延べ約130人が参加した。（本誌）

## 貴重な研究会

第1回の研究会は1979年7月31日に神戸市立心身障害福祉センター（神戸市兵庫区）で開催された。当時の名称は視力障害乳幼児研究会だったが、第4回研究会から現在の視覚障がい乳幼児研究会と改められ、今年、第40回を迎えた。

専門家の意見交換、知識の共有、新しいアイデアを出し合うだけでなく、保護者の子育て体験や生の声を福祉・教育の専門家に届ける場でもある。それらを、子育てや就学で困っている保護者への支援に生かす活動も続けている。

開会の挨拶で相羽大輔さん（愛知教育大学講師）は、教員・視能訓練士・保護者・児童・福祉関係者など、幅広い分野の人が一緒に参加できる貴重な機会だと、研究大会を評価。一方で、視覚障がい乳幼児やその保護者への支援には依然として課題も多い。参加者のつながりの中でよりよい解決策を見出せるよう、「つながるだけでなく、結ばれていくような、広い支援が求められている」と研究会への期待を語った。

## アセスメントから支援へ

まずは、国立特別支援教育総合研究所 教育研修情報部 主任研究員の齊藤由美子さんの基調講演で、テーマは「重複した障がいのある視覚障がい児の指導～見ることとコミュニケーションに関する初期的な力の評価と支援～」。



うちわに台紙を貼った蛍光色の視標でアセスメントの実演をする齊藤さん。後ろ姿は相羽さん

齊藤さんの専門は重度重複障がいで、バックヤードとしては特別支援学校（肢体不自由）の教諭を務めた経験もある。もちろん、「視覚障がいを合わせ有している肢体不自由児」や「視覚障がいを合わせ有している重度障がいのある児童」に関する知識・経験も豊富、と山本会長。

障がいの重度・重複化に伴い、特別支援学校でも、これまで以上に一人ひとりの教育的ニーズを把握することが求められる。しかし、重度重複障がい児には、「見えているかどうかはつきりしない」ことに加え、「コミュニケーションをとることが難しい」ことも少なくない。そのため重複障がいのある子どもの「見え方」と「コミュニケーション」のアセスメント（事前評価・調査）が大切になるのだ。

視覚の状態がはっきりしない子どもに支援を行なうには、何がどのように見えているのか、どのような配慮が必要なのかを把握しなければならない。さらにそのアセスメントは、専門家に限らず多くの学校でも実施可能で、学校での実践につながる必要がある。齊藤さんは、懐中電灯やうちわを用いたツール・